

幼児期の「学び」と「育ち」の基本は 体を動かすことから ～幼児期運動指針を踏まえて～

運動会などでも、保護者に伝えましょう!

園長や担任としての運動会のスピーチやお便りにも生かしてください

全国私立保育園連盟保育・子育て総合研究機構/
兵庫・はっと保育園園長/本誌「遊びっこり箱+」監修者

片山喜章

○運動が足りません!

ひと昔前比べると今は、あまりにも便利で快適になったことで、大人も子どもも日常生活の中で体を動かす機会が少なくなりました。ですから、意識的に早朝から散歩やジョギングをする大人は、増えています。幼児期に対しても、文部科学省も平成24年3月「幼児期運動指針」を策定して、幼児期に毎日、トータルで「60分以上運動することの大切さ」を幼稚園、保育園だけでなく、広く国民に訴えています。「指針」として出されるということは、幼児期の生活の中に、つまり、今の幼稚園、保育園の保育内容の中に、時間的にも内容的にも体を動かす遊びが十分、保障されているといえない現実があるからだとして推し量れます。

○もっともっと体を動かす遊びを楽しく!

『幼児期運動指針』は「動きの多様化」と「動きの洗練化」に大別されています。

「動きの多様化」では、①「体のバランスを取る動き」=立つ、座る、寝ころぶ、起きる、回る、転がる、渡る、ぶら下がるなど、②「体を移動する動き」=歩く、走る、はねる、跳ぶ、登る、下りる、這う、よける、すべるなど、③「用具などを操作する動き」=持つ、運ぶ、投げる、捕る、転がす、蹴る、積む、こく、掘る、押す、引くなど、動きの多彩さを掲げています。つまり、幼児期は、特定のスポーツ(運動)に偏らず、より多彩な動きを繰り返すように推奨しています。

「動きの洗練化」とは、偏りのない多彩な動きを繰り返すことで「身のこなし」がよくなること、ある意味で多彩な運動をした成果ととらえてもよいでしょう。そのことで、自分の身を守る術を体得したり、その後、出会うスポーツにも生かせるという見通しについて述べられています。これは、大人が自分の意志や目標を持って行なう散歩やジョギングと違って、幼児の場合、課業的に行なうのではなく「遊び」という興味・関心に基づいた方法で行なわれるべきだとも記載されています。

○乳幼児期は「遊び」=「学び」! 保護者への働きかけを

保育現場では、幼児期の遊びと学びは同根であるといわれつつも、「よく遊び」、そして「よく学び」といわれるように世の中の認識は、両者を対峙させる傾向が強いようです。つまり、知育的なことは尊ばれ、幼児期に主体的に体を動かし、多彩に運動することが、その子どもの育ちや学びにとって、重要であるという認識が、日本全体に浸透していない厳しい現実はどう向き合っていくのか、保育関係者全体に投げかけられた課題です。

○幼児の特性を知って遊びを展開

一方、保育現場においても、ただ戸外遊び環境を整えるだけでは不十分です。多彩な動きで「身のこなし」をよくする「サーキット運動」や、かかわる力をはぐくむ短時間での「ふれあいゲーム」(『遊びっこり箱+』に掲載)を行ない運動量をしつかり取ることで、大きな愉悦感を味わう、という幼児の特性を知った展開方法が、まだまだ浸透していないこともまた、運動(遊び)の重要性が共有されない内なる要因になっていると考えます。

○遊びが体験できる手だて…ハウツーを!

「…さらに、幼児が楽しく体を動かして遊んでいる中で、多様な動きを身に付けていくことができるように、様々な遊びが体験できるような手立ても必要となります。」(『幼児期運動指針ガイドブック:運動指針策定の意義より』)とありますが、手立てをハウツーという言い方で軽視される風潮が、日本の乳幼児期教育界には存在します。現場に入って、子どもまみれになれば、きっとハウツー自体の良し悪し論ではなく、ハウツーの内容や展開の問題であることに気づかれると思います。現場に即したハウツーが普及しない限り、運動の真の重要性が現場で花開かないのではないのでしょうか。現場で直接、運動プログラム展開している私には、そんなふうに思えます。